

主の 2015 年 9 月 6 日  
第 89 号 創立記念号

日本キリスト教団  
**泉ヶ丘教会**  
牧師 松永政和  
☎ 590-0114  
堺市南区槇塚台 1-1-5  
TEL/FAX 072-291-9532  
メール izumigaoka9532church@yahoo.co.jp

■ 礼拝・集会 ■

- ・ 主日礼拝(日)午前10時30分
- ・ 教会学校(日)午前9時
- ・ 聖書を学び祈る会(木)午前 10 時30分
- ・ キリスト教入門講座・家庭集会
- ・ マリア会・テモテ会、他

■ 教会標語 ■

『キリストを証する教会』  
— 手を携えて歩む —

「アートの島」をご存知でしょうか。正直言ってわたしはつい最近まで知りませんでした。瀬戸内海に浮かぶ直島(なおしま)です。住んでいる人は三千人ほどです。この小さな島が世界的に注目を集めています。三年に一度、周囲の幾つかの島々と共に開催されます「瀬戸内国際芸術祭」の期間中に直島を訪れる人は三〇万人以上にもなるそうです。住民の百倍以上の人が島を訪れるということになりました。

ここで展示されています現代アートの作品は、どこか違う場所で製作されたものを島内に持ち込み設置さ

**教会を建てる**

牧師 松永 政和



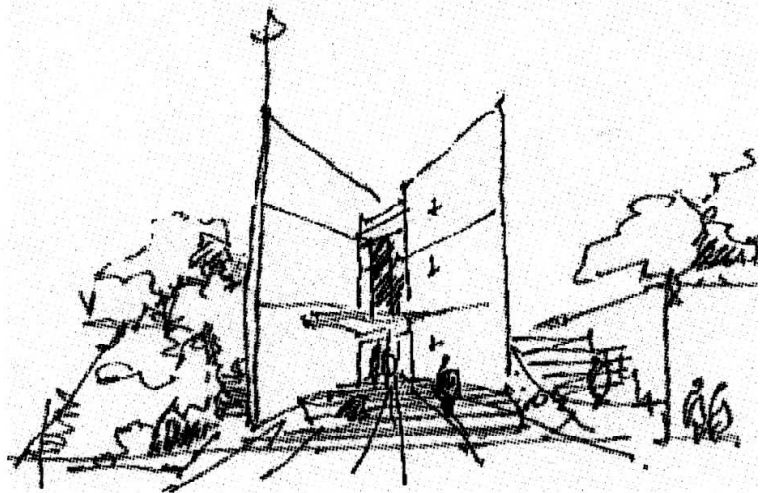
れるのではなく、島の地に立った芸術家が、そこで発想を得て製作、設置するのだそうです。

このアートの島に一つの教会が建てられようとしています。新しく建てられる教会ではありません。五十年も前からあります「香川直島伝道

所」ですが老朽化が進み、部分的な改修では現状維持も難しい状況にある伝道所です。それでも、「この地でキリストの福音を」と願い、現任陪餐会員(教会員)五名の伝道所が新会堂建設の幻を描いてきました。しかしその事業は余りにも荷が重いものでした。それでも祈り続け、道を求めてこられました。

そんな長い祈りの中で、ひとりの人に出会います。大岡山建築設計研究所の田淵諭さんでした。キリスト教についても理解は深く、多くの教会建築に携わって来られています。かくいう私たち泉ヶ丘教会も田淵氏の設計により建てられたものです。教会員の想いを、キリストへの信仰を具体的な形にしてデザインされ建てられています。

教会堂を少し高みから俯瞰しますと、キリストが両手を広げて招いておられる姿で立つ、人ばかりか「教会堂が伝道する」泉ヶ丘教会です。翻って泉ヶ丘教会の歴史を見ますと、「泉北の地に御言葉」の幻が語られたのが始まりでした。巨大プロジ



エクト「泉北ニュータウン計画」が進められ、多くの方が、この開発の進む丘陵地帯に居を構えることになるだろう。その多くの人たちにキリストの福音を伝えることは、私たちがキリスト者の務めではないか。

こうして堺教会の「泉北ニュータウン開拓伝道」のために、一九七三年、泉北・榎塚台伝道所が改造された民家で始まりです。でも十年間は公団との協定により伝道所の看板を立てることも、広く宣伝することもできず、「堺教会分離礼拝」の時代を十年。そして一九八三年、正式に日本基督教団の認可を受け、「泉北・榎塚台伝道所」として公に礼拝を守り、御言葉が語られ、伝道活動も活発に行われてきました。

一九九六年に伝道所改め、「泉ヶ丘教会」が設立されます。それでも礼拝は、少しの改造はありましたが、あいかわらず民家屋で行われていました。そのような中で、教会建設の願いが一人ひとりに、教会全体に膨らんでいきます。そして一九九八年「教会堂・牧師館新築工事」を決議し、具体化へと歩を進めます。

しかし幻を形に計画するまでは良いのですが、一部の人を除いて、だれも今まで教会堂建設に携わったことがありません。いざ進めるとなる様々な、それこそ経験したことの

ない事柄が次々と出てきます。一番苦勞したのは、建築工事の費用の捻出です。一億数千万円の費用、親教会である堺教会からの多額の支援を受けても、最後は教会員一人ひとりの教会に対する熱意です、祈りでした。何度も「だめかもしれない」、「規模を縮小して」と厳しい討議がなされてきました。そのために教会を離れて行った人も出てきました。それは今も私たちの心にとげとして残っています。

ではありますが、私たちは体験しました。主イエス・キリストに在る奇跡をです。二〇〇〇年三月に新会堂が完成しました。その間、何度も私たちの希望や無理な願いに心えて田淵氏をはじめ、建設に携わってくださったっていた方々は、一つひとつ具体化してくださいました。心配していた費用についても、一五七の教会、一七六名の方々の献金も合わせて、一億四千六百万円の建築会計は二〇〇五年三月に最終決算報告をすることができました。

五〇年の歴史を経て「香川直島伝

道所」は「アートの島に祈りの教会」をテーマに掲げ、「世界へ向け直島から」発信することを目指してこの二〇一五年末、日本キリスト教団香川直島伝道所は、新たに生まれ変わります。多くの人が訪れる所ですから、日曜日以外にも、管理者を置いて来訪者を案内することも考えています。(現在は、直島伝道所と、その隣にあります豊島の教会を一人の牧師が兼務しています)。

幸いにも多くの人たちがこの「アートの島 直島」に建てられようとしています。伝道所の篤い思いに賛同しておられます。それでも、小さな群れには十分すぎるほど重い荷であることを、私たちの小さな経験からも推し量ることが出来ます。しかし、主の奇跡は、主が良しとされる処に必ず起こります。そのことを信じ、一つの教会の幻の実現を祈り、支援していきたいものです。直島伝道所も、島全体に繰り広げられますアートの一つとして、彼の地に建てられますようにと願います。

どうぞです。一度直島を訪ねてみま

せんか。三年に一度の瀬戸内国際芸術祭は二〇一六年の春、夏、秋に開催されるとのことです。教会の創立について思いを巡らしています時に届けられた幻を巡らして、泉ヶ丘教会建設のこととダブらして考えてみました。





## 喜びと平安の讚美歌

伊藤 幸栄

私は歌うことが苦手で、歌声にも音程にも自信がありません。賛美を捧げるときも、美しく澄んだ歌声にいつも憧れます。さて、そんな苦手意識はべつにして、胸に響く讚美歌が皆さんにもそれぞれあると思えます。以前、礼拝で賛美したとき、イエス様の愛の深さを強く感じ、心が震えました。

「ひとたびは死にし身も 主によ  
りていま生きぬ みさかえのかがや  
きにつみの雲きえにけり ひるとな  
くよるとなく 主の愛にまもられて  
いつか主にむすばれつ 世にはな  
きまじわりよ。」

日々の生活の中で、私は様々な影

響を受けて、心を騒がせたり、悩んだり、落ち込んだりしてしまいます。そんな時、どれほどイエス様のことを覚えることができるのか？  
恥ずかしいことですが、忘れていたことが多いのです。そんな私でさえも、イエス様は愛してくださいたいこと、いつもは「いつまでか」の、私はその愛によっていつもまもられているという事に気付かせていただき、喜びと平安が与えられる讚美歌です。



## わたしの日曜礼拝

斎藤 百合子

私はクリスチャンになって五年ですが、親代々から信仰生活の中におられる多くの姉妹や、うちの嫁さんは「あの高齢で神様のお招きを素直にうけとめていけるかどうか」と心配していたと思う。

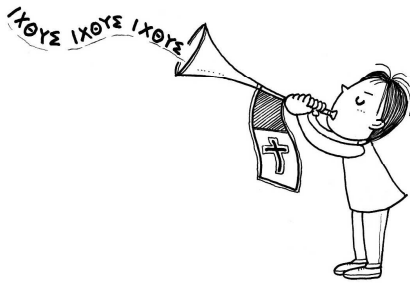
自ら思うに、自我丸だしで自由こそすべてのように思い社会の埃も一杯身に付け、神様の存在は遙か遠くにしていた私は、いたずらに歳をかさね、家族からも手にも負えない輩（やから）とでも言いたげな人間のような気がしている。

私の地域には、自治会や老人会のほか若者集会もある。若者集会は毎



月第二、第四日曜午後二時から行われていきます。そこで日曜日、月二回は午前中は教会に、午後はその集會に出て、若者ともコミニケーションを広げていきます。

そういう私が 受洗の誓いに「ハイ信じます」と言いながら「今週は教会へ行きたくない」と思う時もあります。それでも、うちの嫁さんが玄關まで迎え来てくれるので行かないわけにはいかななくて「有難う」と言っ、礼拝の時間に間に合うかなと気にしながら教会に着きます。人越しに前の方を見るといつもの自分の席が空席になっているではないか、わたしはこれを“神様の招きの礼拝”と勝手に思うようにしています。



今日は、月の最初の日曜日。礼拝は、その日の聖書の言葉、説教題にふさわしい前奏曲が始まります。讃詠五四五の歌詞は短い、最初に奏せられる祈りを込めた美しい曲で“三位一体の神に永遠にみ栄がありますように”という祈りの曲です。讚美歌は神を賛美する歌が多いようです。

歌声はオルガン奏者の旋律に合わせて、おごそかに、ときには喜び、憂い、歓喜に力強く、会堂に溢れ、歌詞を味わいながら歌う全員の表情や姿は、お祈りするかのよう綺麗です。女声の多い混声賛美歌十二番は靈的な感じさえします。

“救われし 民よ おごそかにうたえ あわれみと まことは変わる ことなしと。悩みせまるときも 名を呼ばわれば 主はこたえてこの身をば救う”

今週の説教は『マルコによる福音書』十五章三三〜四七節、「イエスの死と葬り」です。説教の前に歌う讚美歌一二一番は わたしの好きな歌です。イエス様の生涯が凝縮され、涙があふれそうになります。

牧師の説教は、一二一番「十字架



の上にあげられつつも敵を許ししこの人を見よ」と、イエス様の十字架でのお姿が語られ、そのお話には感動を覚えます。

聖書朗読の後の祈りで、牧師が「為政者は“神の摂理によって動くこの世のありように目覚めるように”」といった意味のことを祈られたように感じたわたしの心は、その言葉に強く打たれました。

さて毎月最初の礼拝では、「聖餐」という特別のことがあります。「聖餐」はイエス様が弟子たちと共になさった最後の食事のとき、「これはわたしの体、これはわたしの血」と言われ、パンとブドウ酒を分け与え

られ、「わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われたことよ  
よって、代々の教会が守っています  
聖礼典です。

聖餐感謝の讃美歌の後に「献金」  
があります。差し出された献金袋に  
銘々が感謝の証として心のこもった  
幾許かを献げます。献金感謝の祈り  
がされます。

こうして礼拝は終わりに近づきま  
した。讃美歌頌栄五四二番、“世を  
あげて みさかえつきせぬ 神をた  
たえて”と歌われ、牧師の祝福の言  
葉が聞こえてきます。「主イエスの  
恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あ  
なた方の上に永久に在るように」。  
そして後奏をもって、今日の礼拝を  
終えます。

こうして礼拝を終え、教会を後に、  
イエス様のお言葉を胸に留め、それ  
ぞれの一週が始まります。 Ω



## 出合いの旅 南イタリア

中山 アイ子

「イースター」の3日前に、南イ  
タリアの田舎街を訪ねいろんな出合  
いを体験しました。

これらの出合いをそなえて下さっ  
た主に感謝します。

レッジョ・カラブリア（カラブリア  
州）にて

「ここから海岸沿いに進み、レギオ  
ンに着いた。」使徒言行録28章13節

ローマの市民権を持つパウロは、  
公平な裁判を受けるために、ローマ  
に行くことになりました。



『南イタリア周遊記』キッシング著に、大聖堂正面にこの聖句が刻まれていると書かれています。が気付かまませんでした。しかし教会の前には、大きなパウロの像が立っていました。パウロの最後の航海は、カエサリアから何人かの囚人とアレキサンドリアの船で、ローマに向かう途中で嵐に合い、アドリア海を漂流するという遭難に遭遇し、危険にさらされます。

「助かるいかなる希望も奪い去られた」と使徒言行録に書かれています。14日間の漂流後に、必ずどこかの島に打ちあげられると神を信じ、やっとのことでマルタ島に漂着します。生き延びるために何か食べることが必要だったので神に祈りを捧げました。この島から3か月後にやっとアレキサンドリアの船で出港することが出来、それから、シチリア島に3日間滞在してパウロたちはやっとの思いで、南イタリアのカラブリア州のレギウムに着きます。

祈りは必ず聞き遂げられると信じています。キッシングもこの聖句を大聖堂の正面で目にした時、不思議な感動を覚え、その日一日中、頭の中

で聖句が鳴り響いたと書いています。

私は、パウロたちはアッピア街道の石畳を歩いてローマへの最後の旅をしたと思っています。しかし嵐に遭遇し、いかなる希望も失い、レギオン（現在のレッジョ・カラブリア）に着いたという聖句を読み、この場所に立っている自分が歴史の中にいるような不思議な出会いを感じました。

ローマに着いたパウロは、皇帝ネロによってローマで殉教しています。

トロペア（カラブリア州）にて

バロック様式のイエズス会のジェズ教会は、天国の色である緑色の大理石を多用したねじれ柱などの過度の装飾で飾られていて、字が読めない人々にも聖句が分かるようにと改革されたバロックそのものでした。

2015年の『イースター』は、3月29日〜4月5日です。今日は復活祭前の聖金曜日。この教会から聖金曜日の厳かな「SEPULCRO」という「聖行進」が20時に出発する予定だと教会の伝言板を見て知りました。村全体が、イエスの受難、死、復活



という出来事に集中するという特別な時です。

聖金曜日の「聖行進」をカメラに収めようと初めて見る厳かな行進を心待ちしました。

遠くから荘厳な何ともやるせない、深い悲しみの音色が聞こえてきます。初めて耳にする重厚な、悲しみに満ちた音楽に合わせ、ジェズ教会にあった十字架とマリアの像を持って一歩一歩司祭たち、信者、町民、子供た

ちが行進を続けます。前を通り過ぎていく司祭たちの表情は笑いがなく、あまりにも荘厳すぎるセレモニーにカメラを向けることが出来ませんでした。聖行進が、通り過ぎる時間にあわせ、家々の電燈が消されます。南イタリアの人たちは、信仰篤く、イエスの受難、死、復活の儀式の、善き伝統を守っている温かい人々が多いです。いかに主イエスの復活を民衆たちが待ち焦がれているかを、身をもって感じる事が出来ました。

聖金曜日のイースターの前日に、トロペアの街を訪れ、偶然にもこんなシーンを見ることが出来たことに、驚きと感動を覚え、偶然の出会いを心から感謝しました。

南イタリアのどの教会でも、イースターまでは、マリアの像をカーテンで覆って復活を待ちます。イースターの当日は全てが休みで、車も走っていません。ガソリンスタンドも休みです。町には誰もいなく、「イースター」は家族と一緒に祝いすることが習わしになっています。

プリンディジ(プーリア州)にて「すべての道はローマに通ず」と



云われる街道の中でも、アッピア街道 (Via Appia) は、最も重要な道で、「街道の女王」と称されました。アッピア街道は、シルクロードの西の起点・ローマとアドリア海の重要な港街・プリンディジを結んでいる道であり、またローマ帝国の生命線のギリシャへと続いています。このア

ッピア街道を歩いた多くの信仰の先人たちに想いを馳せました。

私は、30年ほど前、アッピア街道の石畳の上を、ローマからアッピア街道上に在るサン・カッリストのカタコンベ(キリスト教徒の地下共同墓地として使われました)まで、往時の面影を残す石畳の上を歩いたことがあります。その時に、何時かアッピア街道の終点の町プリンディジへ行ってみたいと思いついてきました。

“Quo vadis Domine?”

(主よ、何処に行かれるのですか?)  
「ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現すようになるかを示そうとして、イエスはこう言われたのである。ペトロに「私に従いなさい」  
「わたしの羊を飼いなさい」ヨハネ 21・19

ノーベル賞作家 ヘンリク・シエンキエヴィチ作『Quo vadis, Domine!』を、読んだことがあります。

皇帝ネロの迫害によるキリスト教受難の時代に大規模な弾圧を受け、アッピア街道を逃げて逃げるペトロが、イエス・キリストと再会したと





伝えられるのも、このアッピア街道です。  
 ペトロがイエスに「主よ、どちらに行かれるのですか？」と訪ね、イエスは「お前が私の民であるキリスト教徒を見捨てるので、私は十字架にかけられるために、再びローマに行かなければならない。戻ってお前の十字架を負いなさい」と。これを聞き、ペトロはローマに戻り、磔刑（逆さ十字架刑）によって殺されます。  
 ペトロがアッピア街道を通ってローマに行ったのが、何時か分かりませんが、ネロの迫害によってローマで殉教しています。  
 ブリンディジのディオニッソス広場に立つ、古代ローマの円柱「コロナ・ロマーナ」は、アッピア街道

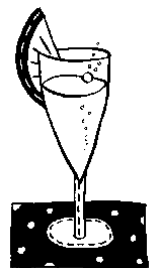
の終点を示すランドマークです。どこまでも青い空と紺碧の海の間に、対岸のアルバニアやギリシャの山々がうつすらと見えています。

主の御名を賛美し、旅の最後まで守り導いて下さいました主の恵みを中心から感謝します。  
 Ω



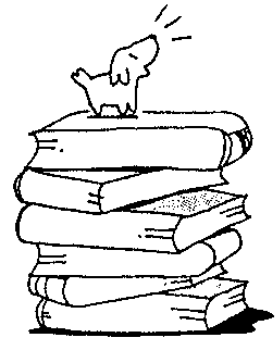
### ちよつと一呼吸

野々下 陽子



今年も暑い夏が過ぎて行きました。我が家は、長期夏休みのある学生がいる最後の年となりました。日常生活サイクルが変わって、毎年毎日バタバタ忙しく落ち着かない夏をずいぶん長年過ごしてきましたが、これも終わりになると思うと、嬉しいのか気が抜けて淋しくなるのかちよつと複雑な感じです。

この夏、整理しようとして開けた戸棚から一冊のファイル帳が出てきました。それは20年前に主人の祖母の米寿のお祝いに私が作って渡した物でしたが、祖母が亡くなって片づけた時に叔父が見つけて我が家に持って来てくれて、そのまま戸棚に置いたままになっていた物でした。中であつたのは長女の誕生からの



6年間、間に長男、次男の誕生を挟んだ子ども達の写真と手形、絵などの成長記録でした。写真は可愛かった頃の子どもの達の生活の場面が切り取られた物ばかり、私は懐かしくてちよっと興奮して家族皆に見せて回りました。子どもたちの反応はクールで、一人騒いでいる自分が昔を懐かしむ年齢になっていることに気づいたのでした。

毎日目の前の事をこなして行くだけで終わって行った日々は長く、このアルバムを作った事も覚えてはいません。その頃に社会で起こった事なども私の記憶には全然インプットされていませんが、写真に残る、満面の笑みをこちらに向けている幼い子どもたちの表情を見て、家族が確かにそこを通して来たんだなあ、とちよっと一呼吸して過去を振り返り

考える時間になりました。そして、この写真の時期から少ししてから私は教会を知ることになりましたが、子どもたちの成長に従ってだんだん親の思い通りには出来なくなっていく頃に「子どもたちは神様から預かっている」と教えられ、子育ての意味を教えられた事は大きな事だったと感謝の気持ちを新たにしました。

忙しく夢中で歩いて来た時期はどうも過ぎて行きつつあり、小さな私の人生もその時々変化しながら積み重ねられて来ていることを考えながら、これから新しい段階へいく年齢になってきているのだらうと、思いはあちこち巡ります。

歳を重ねてきた親達の姿にそれぞれの歴史をちよっと想像するようになったり、成長した子どもたちを見上げながら口数多く言わなくていいことを繰り返す私の癖は変えられなかったり、これからの夫婦の生活を考えたり、全ていつも途上で通過点ですが、今までを導いて来てくれた神様をこれからも求めて、そして私の受けた物が誰かにかからでも伝わったら、と願います。

戸棚の整理をしようとして見つけ

た懐かしいものから、その時その時に神様から喜びを戴いて来ていることを思う事が出来ました。一方、苦手な整理の方はうまく片づけることが出来ずに、以前の状態からあまり変わらないまま戸棚の扉は閉じられる事になりました。





## わたしの終戦七〇年

斎藤 百合子

八月の礼拝では、牧師が世界の平和のために祈りました。「いつとこの間、この国を司るようにと立てられている為政者が、神の摂理によって働くこの世の有り様を前に、正しい判断ができますように」と。また新聞もテレビも節目の年として、各界が終戦七〇年をどう受け止めたかを大きく取り上げています。この祈りや動きに励まされて、わたしなりの「七〇年の感慨」を書いてみました。

七〇年前の八月一日、終戦の日。ラジオ放送された昭和天皇のお言葉の録音が改めて流れていました。それを聞いた当時の人たちは今も少数なくなりましたが昭和天皇の複

雑な心情を再度 推し量ると胸が詰まります。

無意味な戦争にかりだされて、飢えや過酷な労働に耐えきれず死んでいった多くの若者たちをはじめ、私は実父、三人の姉の連れ合い全員、防空壕の中で小さな甥らと共に亡くし、亡父はシベリアに四年も抑留されました。もうこれ以上泣くまいとしているのに涙が止りません。

そんな涙に潤む目をテレビからそらして新聞を見ますと、「キリスト者が次々に戦争法案の強行採決に抗議」とあります

日本キリスト教団をはじめ、多くのキリスト教関係団体とも廃案を求める声明を出している、という記事でした。日本キリスト教団は「剣を打ち直して鍬とし、槍を打ち直して鎌とする」（イザヤ二章四節）との聖書の言葉を引き、「為政者が謙虚になり、国民の思いに心を寄せ、秩序をもって政治を司るよう切に祈る」と言い、そのほかのキリスト教諸団体もそれぞれの思いの中で「信仰をこころの問題だけに限らず、政治的な課題に対してもコメントすべきだ」

との思いから、「聖書に基づいて言いたい。戦うこと、殺すことはできません」と法案の撤回、廃案を求めています。

言い換えれば「戦争は二度と繰り返してはならない」という抗議の言葉ではないでしょうか。多くの人々はどのような思いでしょうか。月の初めの聖餐でイエス様の肉と血を分け与えられたキリスト者は、いま何を、どうすれば良いのでしょうか。

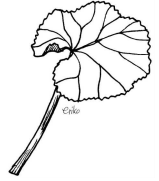
私は教会ではいつも傍に備え付けの補聴器を使い 牧師の説教や祈りに目をつぶって聞いています。すると自分ひとりで神様と対話しているように一つ一つがこころに深く染みこんできて、いかにも自分の無力を感じます。

神様が創られ、見守ってください。この世界に「悪魔のささやきを封じ込める力が与えられるように」と朝に夕に祈っています。

Ω



「超海！」



岸本 眞

クマゼミのけたたましい鳴き声から夏の終わりを告げるツクツクホウシの鳴き声が変わってきた晩夏の早朝に早起きできた日には、小さな草原やポプラ並木や泉ヶ丘プールが見下ろせる通い慣れたお気に入りの高い丘まで散歩に出て、そのベンチに腰掛けて出勤までのしばらくの時、読書することを日々のささやかな楽しみにしています。

そこでは毎朝のように、私の座ったベンチから適当な距離を置いて、仲のよさそうな老人二人が器用にベンチに向き合って座って将棋を指しています。

私は、読書を遮る二人の楽しそうな会話に、聞くでもなく聞こえてくる二人の会話にいつしか耳を傾けて

いました。将棋は勝敗を決する終盤の詰めにさしかかっているようでした。

「何とかなるやろと思たのによ、無理したらあかん。」「今日はこれくらいやな。」

これでやっと静かになるなど、私が安堵したのもつかの間、二人は勝敗が決した直後、さっそく新たにコマを並べ始めます。こうやって毎朝のように傍の私など気にもかけずに優に五、六局、飽きもせず楽しんでうに語らいながら将棋を楽しんでいました。

今夏に、同業者である弟夫妻の要請を受けて、東日本大震災で被害を受けた茨城県と福島県との県境にある小さな町の重い障害を持った方々の入所する施設へリハビリ指導に行ってきました。

講習の始まる朝に、私は未曾有の大津波が起きた後も、変わらず太平洋に昇る神さまの励ましの日の出が見たくて、海まで一人散歩に出ました。

早朝の、人影もまばらな海水浴場の砂浜から見渡す大海原の水平線か

ら指してくる朝日を見ていて、私は「光あれ」と宣言された神さまの、この世界を創造された瞬間を思い起こしていました。

そのとき、三人の若者たちが突然堤防を乗り越えてわいわいと何やら楽しそうに話しながら近づいてきました。そしてそのうちの一人の若い女の子が、海が見えたとたん叫び声をあげました。

「超海！」

初老にさしかかろうとしている私には、彼女のその素直な叫びが受け



入れがたい難解な表現だったことに半ば苦笑いしながらも、そうとしか言い表せない思いを最近の若者らしい造語でつい叫びたくなったその思いを汲んで、微笑ましくも思いました。

将棋の勝ち負けの些細な軋轢などは気にもせず、確かめ合っている親密な関係の中で交わされる老人たちの日常の言葉のやりとりは、相手に向かって話しかけているようでいて、実は言葉を交わしながらも、実は自分の心に向かって何かを確かめるように呟いているのじゃないかと思えますし、親しい友達に向かって「聞いて、聞いて！超海！」と叫んだ女の子だって同じように、その感動を言葉にすることで、実は自分の抑えきれない感動の思いを自分に向かって叫んでいるように思えました。

私たちはいつでも、誰かに向かって話しかけます。会話はそうやって誰かと思いを共有しているのではありませんが、けれどもなぜ言葉にして自分の思いを表したいのか、その理由については、まったく意識していないように思えます。

私はこんなふうに思います。神さまはきつと私たちにこう語りかけておられるのだと。「私があなたたちをこの世界を創ったときに、私とそうやって親しく話していたのだよ」と。私はあなたたちが、私に向かって話しかけるような存在に創ったのだよ、と。

「何とかなるやろと思たのによ、無理したらあかんよな、神さま。」「超海やね！神さま」と、私に話せなくなったのは、あなたたちの中にある「自分が」という罪のせいなんだよ、と。

主イエス・キリストは、私の自分では救えない罪を、罪の代価である私の死によってではではけして補えないために、私に代わって神さまに赦してもらったために、十字架にかかって死んで下さいました。だから主イエス様の十字架は、私がもう一度神さまに向かって話しかけられるようにと願い、見放さないでどこまでも愛して下さいました愛のしるしなんだと思えます。

この原稿を書いている時も、私はあいかかわらず自分の思いと自問自答し

ています。そんな私でさえ、神さまはあきらめずに私に向かって語りかけ続けて下さっています。

初代の教会は、主イエスさまの十字架の上での振り絞るような嗚咽の言葉として、どうしてもこう告白せずにはおられなかったのだと思えます。

「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ 23・34)

私たちは、誰に向かって自分の思いや行いを話し、親しい関係を結ぶことが、本当に満たされることなのかを知らないでいるんだと、気づかせられた夏の一日でした。



## 夏期学校を通して

有銘 能亜



うだるような暑さの中、セミの鳴き声が聞こえ、礼拝堂には子供達の甲高い声が響きます。今年も夏期学校が始まったなという気持ちになりました。

今年の夏期学校は8月4日から6日までの3日間でした。2012年から一緒に参加させてもらっている堺川尻教会との夏期学校ですが、早いもので今年で、4回目になりました。最初の年は、新しいことが始まるワクワク感と緊張感がありました。今年も落ち着いた気持ちだと自分で

も感じました。

夏期学校の参加者は、生徒、スタッフ全員で95名の参加でした。泉ヶ丘教会からの参加者は高校生の男子1名、女子1名、小学生の女子1名の生徒3名、スタッフ2名でした。今年はそのうちの生徒2名が初参加で、堺川尻教会の教会学校との交わりも初めてだったので、うまく溶け込めるかな、楽しく三日間過ごせるかなと心配していました。初参加の子供達は開会礼拝の時は、緊張しているようでした。

開会礼拝が終わると、子供達はバスで、一部のスタッフは自家用車で貝塚市の山の中にある大阪府立少年自然の家に向かいました。

施設の四方八方が山で、空気がきれいな場所でした。現地に着くとオリエンテーションをし、その後、少しゲームをして、すぐに夜ごはんでした。夕方の5時からのごはんでした。

普段、私は夜の9時以降に晩御飯を食べるので、時差のある国に移動したような気分でした。夜ごはんを食べた後、ひと休みして、キャンプファイアでした。6時半から始まり

たキャンプファイアはあたりはまだまだ明るく、雰囲気としてはまだまだという感じでしたが、当の子供達は、十分にそこで練り広げられるゲームに没頭していました。

キャンプファイアが終わるとお風呂でした。お風呂がなかなか大変なイベントで、何が大変かというと、小さな子供達のお世話です。幼稚園の年長から、小学生の1、2年生くらいまでの子供達は、脱衣所での着替えや、お風呂の中で溺れないかの見張り、体や頭を洗う手伝い、出た後の体を拭いたりとお世話が必要になります。彼らを若いスタッフと中高生の生徒と共に、面倒を見てました。お風呂の後は、もう寝る準備でした。このように忙しくしていたのですが、合間合間に気になる泉ヶ丘教会の子供達の様子を見に行き、柱の陰からどうしてるんかな?と見たり、声をかけたりしていました。堺川尻教会の教会学校の先生達も気にかけてくださっていました。夜にはもう馴染んでいる様子で、ワイワイやっていたので、とても安心したのを記憶しています。

二日目は6時半に起床で、(これま



た普通の生活では考えられない早い時間に起き、野外礼拝、朝食と続きました。朝食を食べた後は、分級で、それが終わるとお昼ごはんでした。

午後のプログラムは、それぞれが希望する活動に分かれて、グループごとに工作をしたり、ブーメラン作りなどの別々のメニューをしました。その後は、縦割りのグループでの飯盒炊飯でした。飯盒炊飯は定番の力レーライスでした。幼稚園の子供達は、切った野菜を型でくりぬいたり、小学生は野菜を切ったり、米を研い

だり、中高生達は、火の番をしたりと協力しながら作りました。今年はそのグループも美味しく作れたようです。

夕食の後は、慌ただしいお風呂の時間でした。前日と同様、中高生と共に小さい子供達のお世話をしながら入りました。その後は、自由時間があり、就寝準備でした。このころになると、子供達は和気あいあいと仲良くなっていました。子供達の部屋は、八人部屋なのですが、カードゲームをしたり、おしゃべりしたり、先生達に自作の劇を見せてくれる子供達もいました。

就寝前には部屋の子供達それぞれが順番にお祈りをして眠りにつきました。ただ、中高生はそんな時間になるはずもなく、部屋でおしゃべりをしたり、トランプをしたりと楽しんでいました。一日目もそうだったのですが、スタッフは食堂の端の方で1時間くらいのスタッフ会議がありました。会議の後は中高生達、若いスタッフ達と人狼(じんろう)というゲームをしながら、お互いの普通の生活や将来のこと、信仰のこと、洗礼について等々の話を話していま

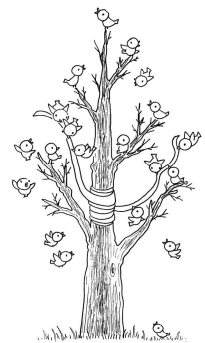
した。良い語り合いの機会になりました。ただ、夜遅くまで起きていたため次の日がとても眠たかったです。三日目は同じく6時半起床で、朝の礼拝、そうじ、朝食を終え、分級をしました。その後、全員が集まって、三日間分級してきた内容をそれぞれのクラスが発表しました。その後、昼食をいただいて、閉校礼拝をして、またバスで堺川尻教会に戻ってきて解散という旅程でした。

今回の夏期学校のテーマは「わたしは良い羊飼い」でヨハネによる福音書10章14説のみ言葉を中心に、聞いてきました。私たちは、三日間の礼拝、分級を通して、イエス様は私たちのことを覚えていてくださり、呼んでくださっているということに改めて聞きました。

三日間の活動を通して、子供達はとても楽しんでいました。この楽しさって気持ちですが、イエス様につながる、つまり、教会につながる喜びの一つだと実感を伴って知ったと思います。教会学校の先生達、子供達が、私たちの羊飼いであるイエス様の声を聞き、それに応えて生き続けることを願っています。

# 気づく

時武 哲也



7月中旬の早朝、私はテニスコートに座り込み身動きが取れなくなりました。娘との一年ぶりのテニス。しかしやり始めて早々に右足ふくらはぎの肉離れ。左足だが七、八年前にも肉離れになった経験があり今回が二度目。その時は嫌な音があり、これが肉離れかと実感できる状態だった。しかし今回はそこまでひどくないのでは…立てるのでは…と、希望をもって足に力を入れてみる。しかし右足は立ち上がろうとする私の意志に反して反応してくれなかった。

普段の生活の中では歩けることは当たり前と思ってしまう。け

れどその時は足を一步踏み込んだとたんに、まっすぐに立ち上がることさえ出来ない自分があった。

事が起きて初めて気づく。私のこの体は一つ一つの部分も神様が愛をもって形作って下さっている。日々当たり前のように思っている私のこの生活は、神様によって祝福されていることを。

肉離れの痛みがすこしずつ癒され、そろそろ本格的なりハビリを始めようと考えていた時、肺炎にかかり入院。四人部屋で先に入られていた二人の年配男性の会話をベッドに横たわりながら聞いていた。70代後半の男性がポツリポツリと話し始められた。「私は今まで何でも人任せで自分では何もしてこなかった。家族や周りの人の気持ちも考えようとしなかった。本当に自分はバカな人間だと思う。どうしようもない人間だ。死を考える年齢になって初めて思った。今ごろ判ってももう遅いわなあ。」するともう一人の年配の男性は、「判っただけ良かったんとちがいますか。今からできますやろ。」この方は歳を重ね、体が不自由になって入院生活を送る中で、自分の

人生を振り返り見詰め直す機会を神様が与えて下さったのではないか。痛みや困難を通して神様は私たちに大切なことを気づかせて下さる。今もこの方の事が忘れられない。直接お話しすることは出来なかったけれど、神様の導きの中で新しく生きていかれることを願う。Ω

